文化のページ

「愛と和平の石像」カママ嶺に

牡丹社事件、二人の研究者が宮古で発表

んきゃーん塾主宰　さどやま　せいこ

市民の憩いの場とするカママ嶺公園の一角に、最近、不思議な石像が建った。隣に「愛と和平の記念碑」という文言の入った碑も並んでいる。どこか見覚えのある石像をよく見ると、これまで、下地中学校の校庭にあった記念碑のようだということが分かった。

そういえば、二人の研究者がこの石像についての講演会も行っている。一人は作家の平野久美子さん、そして、もう一方は琉球大学人文社会学部の大浜郁子さんだ。今年は、近代日本最初の海外派兵である「台湾出兵」から152年を迎えるという。内容が重いだけになかなか取り組めなかったが、去る6月9日付け、宮古毎日新聞の社会面トップを飾った「牡丹社事件がつないだ縁」の記事を読んで、あれほど重たかったテーマが、子供たちの笑顔によって、全て帳消しになったような胸の支えを覚えた。

作家の平野久美子氏は、このほど、著書『牡丹社事件　マヴイの行方　日本と台湾、それぞれの和解』を出版。宮古島市未来創造センターで報告会が行われた。映写なども取り入れた内容で関連年表を中心に進められ、とても、内容の濃いものとなった。写真もふんだんに取り入れ、宮古、八重山から参加した親善交流団の写真も花を添えた。その中でも、著書の中にある故・伊志嶺亮市長がパイワン族の女をやさしく抱きしめる写真は印象的だ。

東京出身の平野氏は、2021年5月に同著書の第2刷増補版を刊行している。本書は、1871（明治4）年に起きた琉球民遭難殺害事件と、1874（明治7）年の台湾出兵の二つの事件を未裔（まつえい）たちと共に現代の視点から、その取材記録をまとめたもの。これらの事件は、琉球（沖縄）、日本、清国（中国）、台湾の近代史として重要な意味をもつといわれている。というのも、当時の明治政府が、台湾に出兵する契機となった大きな事件でもあったからである。

そもそも、琉球民遭難殺害の悲劇は1871年10月18日から始まっている。この日、那覇港には島々から琉球王府に織物や穀物などの年貢を納めにやってきた貢納船が忙しげに出入りし、八重山諸島や宮古島からやってきた貢納船の乗組員たちでひしめいていた。ようやくその任務を終えて帰路についたところだった。

なぜかその日は、天気に恵まれず、ようやく船出したものの大海原に出ると天候が急変、猛烈な風に翻弄（ほんろう）され、船はあっという間に沖に流されてしまったようだ。台湾に漂着した宮古島船の乗組員66名は原住民の村に迷い込んだ。言葉が通じなかったことから誤解が生じ、54人が殺害され首を狩られた痛ましい事件が起きてしまった。この事件を政治利用した日本政府は、3年後に台湾に攻め入り「牡丹社事件」を引き起こす。この一連の事件は、明治4年に起きた琉球民遭難殺害事件を口実に陸軍中将の西郷従道が、大群を率いて台湾へ出兵した「征台（せいたい）の役（えき）」と、日本と台湾では「牡丹社（ぼたんしゃ）事件（じけん）」としてひとくくりにして語られるようになった。

愛と和平の記念碑
1871年10月18日遭難殺害事件で、54名の琉球人が台湾の牡丹社の地で命を落とされました。
日本の台湾出兵（征台の役）の原因となったこの事件は、琉球人、日本人、台湾人、清国人の人命にかかわる国際的な問題でした。
この事件を通じ、日本は琉球を自国の領土であると主張し、台湾は「化外の地」であるとみなしていました。
琉球人、日本人、台湾人、清国人の人命を犠牲にしてまで、日本は琉球を自国の領土にしようとしました。
琉球人、日本人、台湾人、清国人の人命を犠牲にしてまで、日本は台湾を「化外の地」であるとみなしていました。
琉球人、日本人、台湾人、清国人の人命を犠牲にしてまで、日本は台湾